

坂本 實教授のご退任を惜しむ

専修大学 経営学部 教授 魚田 勝臣

先生は平成18年6月に古希を迎えられました。そのこと自体は大変おめでたいことですが、同時にその年度の終わりをもって専修大学を去られることを意味し、ご指導をいただいている後輩教員としては大変寂しく思います。また、専修大学が革新を必要としている大事な時期に、高い識見と貴重なご経験を積まれた先生が去られることを真に残念に思います。

ネットワーク情報学部は、平成13年に経営学部情報管理学科が分離独立して生まれた学部であり、経営学部と兄弟の関係にあります。

坂本先生と私の関係は、

専修大学入職後間もない頃の学部長であり、

同じ情報管理系列ということで懇意にいただいたこと、

近年になって同じ時期に、学部長を務めさせていただいたこと、

の3点にあります。これらを中心に私が経験した坂本先生に関するエピソードのいくつかをご紹介します、惜別の辞とさせていただきます。

坂本先生は10年間続いた出牛正芳経営学部長の後任として、平成2年9月に就任されました。企業から移籍された新米の教授には、このころの坂本先生の印象がとりわけ強く脳裏にあります。

坂本先生の就任直後の教授会で、出牛先生がチクリチクリとご質問やご意見を述べられるのを、全員が静まりかえり固唾を呑んで聞いていたのを覚えております。ご自分が推して就任された学部長なので、もう少し愛情のある指摘の仕方があるように思ったものです。出牛先生特有の後任の育成手法だったのかもしれませんが。

当時は経営学部の出牛先生、蔵下勝行先生、井下武厚先生と商学部の小澤康人先生の4人の先生が向ヶ丘遊園あたりでよく飲んでおられました。ご本人たちは他愛のないお話をされていたのかもしれませんが、回りはピリピリされていたと思っております。時には坂本先生もご一緒でしたが、なんとなくお偉い方に呼ばれて参加されている感じを持っておりました。

このころの印象から、坂本先生はずいぶん忍耐強い方であり、学部長たるものには忍耐が必要なのだと認識を持ちました。

ところで、私の入職は平成元年の4月で、同年の入職は8人おり空前絶後といわれました。実際この記録は今も破られていません。

ご案内のことかと思いますが、一般に大学の教員は教育者として特別な指導を受けることなくいきなり職務に就きます。私も同じで非常勤講師歴は長いものの不安でしたので、同期会を作って親睦を深めるとともに教育や研究を進めるにあたっての意見や悩みを交換しておりました。

坂本先生が学部長に就任されたのを機会に先生をお招きしてお話を伺おうということで、バーベキューの席に先生をお呼びして一緒に食事をするようになりました。普通にやったのでは面白くないというので、ある「企み」を考えました。その遂行にはお偉い方の参加を得て、事務方のお目こぼしが必要でした。それで学部長の坂本先生に

ご出席いただくことになったわけですが、先生には気軽に承諾いただいたのですが、当日になって「企み」に気づかれて躊躇されました。環境を整え、先生を説得して結局はご協力いただき、会は最高に盛り上がりました。この時以来、先生は「魚田は怪しいヤツ」とお考えになっているのではないかと危惧しております。私は逆に、坂本先生は「大学の内部にとりわけ気配りをなさる慎重な先生」という印象を持ちました。なお、「企み」の内容は文書に残すわけにはいきません。まあ、ヤンチャ程度の他愛ないことであつただけ記しておきます。

坂本先生が学部長の間にもう一つ強烈な印象が残っています。

学部長には教授会運営などのために協力者が必要だということで、学部長補佐の制度が発議されました。当事者である坂本学部長は反対の様子でしたが、周りが勧める形でした。企業から来て間もない私には、学部長本人が要らないといっているのに、周りが押し付けるなんて、大学とはなんと不思議な組織かと感じました。私自身も「手続きが増えるだけでよくない」と反対しましたが、結局議決され、坂本学部長は初代の学部長補佐に3人をお選びになり、それぞれ就任されました。坂本先生の素直さに改めて敬服した次第です。この出来事によって教授会の権限の重さを思い知ることとなり、良い面悪い面が認識できるようになりました。

その後、竹村憲郎先生が学部長の時、補佐を勤めさせていただきました。教授会の前に学部長室に集まり、その日の式次第を打ち合わせて教授会の進行に協力する程度で、その役割が良く理解できませんでした。しかし、自分が学部長になって補佐を置くことになり、従来のような形式的なものでなくて、補佐の先生方と執行部を構成して、ともに学部の未来を担っていただきました。坂本先生の学部長に時に補佐の制度ができた賜と感謝しております。

坂本先生は、急逝された高津信三学部長の後任として3期目の学部長を務められ、私もご一緒させていただきました。この時期の学部長会は旧体制から積み残されていた全学課題の解決のために結束がすこぶる堅固でした。現在もそうかと思いますが、全員が革新の意識に燃えておりましたので、学部長会の回数が増え長時間にわたるようになりました。熱を帯び侃々諤々の議論が飛び交いました。そんなとき坂本先生はいつも冷静で多くを語らず、皆の意見をじっと聞いて核心をつかれ、全体の意見を集約するような形で結論が出ることも少なからずありました。「長老は斯くあるべし」の鑑のような先生の振る舞いに尊敬の意識を強く持ちました。

以上数多のエピソードの中からいくつか述べさせていただきましたが、坂本先生は私にとって教員生活と学部長職の両面での道しるべの方でありました。計り知れない恩恵とご指導を賜りました。そんな坂本先生が学園を去られることは本当に残念でなりません。

これまで賜りましたご指導とご厚誼に対し、満腔の謝意を表しますとともに、先生のますますのご健康とご活躍を祈念申し上げ、惜別の言葉とさせていただきます。

2007年1月